



石狩川河口左岸の風景

飲んだのはニシン場などの漁夫で一番安い酒として愛された。冒頭の漂着した徳利の焼きや釉薬の感じは、越後産の焼酎徳利に似た例がある。ただ、これまで小型のものはあまり知られて

いないようだ。別産地の徳利の可能性もあるが、今は越後産に絞って調べている。そのうち、漂着した徳利をもち新潟に行つてみよう。
(学芸協力員 石橋孝夫)



漂着した徳利



越後産焼酎徳利
(北海道博物館蔵)



越後産焼酎徳利破片
(石狩川河口左岸)



石狩市学芸協力員
石橋孝夫 Takao Ishibashi

専門分野は考古学と石狩史。石狩紅葉山49号遺跡の発掘を手がけたほか、縄文時代から江戸時代に至るサケ漁の方法や文化について研究する。

間文化財課 いしかり砂丘の風資料館 ☎62・3711 ※火曜休館

ERIS 「いしかり博物誌」は、えりすいしかりネットテレビ(<http://www.i-eris.tv/>)でもご覧いただけます。

弁財船が運んだ徳利

3月下旬、石狩川河口左岸で完品の徳利が漂着しているのを見つけた。形などから最近のものではない。首が長く、高さ22cm、胴回り38cmで灰色の釉薬が内外にかけられている。容量は約500ccで3合弱である。

石狩浜や聚富、望来、古潭の浜では幕末から明治期の陶磁器片が時々漂着する。これらは当時の生活用品で、すべて本州から運ばれたものだ。種類は膽皿(三平皿)、徳利類、甕類とお碗が少々。中でも徳利が最も多い。産地は遠く肥前(佐賀県)産もあるが、大半は新潟産の「越後産焼酎徳利」と呼ばれる焼酎の運搬用容器である。容量は8合(約1.4リットル)前後で、漂着した徳利の倍以上ある。この徳利は新潟県の西蒲原と北蒲原にあった20

弁財船

本州では北前船ともいう。春、対馬海流に乗り北海道にきて、夏から秋にニシンの加工品などを積み「あい風(北からの微風)」で母港に帰った。